患者を支える人々

臨床工学技士

近藤敏哉さん

1 医療機器管理のスペシャリスト

2 手術に立ち会い、異常を察知

68年生まれ。91年、亀田メディカルセンター亀田総合病院に勤務。日本臨床工学技士会会員、千葉県臨床工学技士会常務理事。

千葉県鴨川市の亀田総合病院（925床）に臨床工学技士は35人いる。臨床工学技士とは医療機器のスペシャリストで、内科・外科を問わず、おもに治療中の操作・監視とトラブル対応、その前後の保守点検などの管理をする。

キャリア18年目の近藤敏哉さん（41）は1日平均4、5件の手術を担当している。

たとえば、脳腫瘍の場合は心電図モニター、麻酔器、頭の骨をあけるドリル、腫瘍を切除する電気メス、切除時に患部を拡大するマイクロ顕微鏡、血管から腫瘍をうまくはがすための超音波手術器などが用いられる。

手術中、それらが安全に確実に作動しているか、近藤さんは目で見るだけでなく、耳で音を聞き分けながら異常を察知する。

「メスの切れ味が悪くなると、いつもと違う音がする。そんなときは手術がスムーズに進行するよう、医師が気付かないうちに刃先を交換します」

メーカーごとの特徴や性能にも詳しいので、医師から相談を受け助言することも。

消化器内科医長の三方林太郎医師は「臨床工学技士さんが手術室にいてくださると、トラブルがあってもすぐ対応できる。非常に心強い存在です」と言い切る。

だが、臨床工学技士が手術室に立ち会う病院は、全国的にまだ少ない。

退院後の在宅療養時には、患者がモルヒネなどの鎮痛剤で痛みをコントロールするための小型ポンプを手配し、使い方を説明する。

近年、治療の進歩とともに医療機器は性能がより高度化され、種類が膨大に増えた。亀田総合病院には50種類以上1000を超す医療機器が登録されているが「それらのことは任せてほしい」と胸を張る。

近藤さんは小さい頃から電気や機械が大好きで「いつも片手にドライバーを握っていた」。医療の道とは縁遠いと思っていたが、学生時代にこの仕事を知り興味を持った。

96年から13年連続、医師が集まる日本内視鏡外科学会で臨床工学技士の役割を発表する。

毎年、新しい医療機器が病院に相当数導入されるので、週末は勉強に充てている。「病院では完全に縁の下の力持ち。でも、自分がかかわる機械によって患者さんが元気になるのはうれしいです」

（医療ジャーナリスト・福原麻希）

アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載しています